

P2-017

3歳児を持つ母親の自己効力感とソーシャルサポートの関連

関 美雪、吉岡 幸子

埼玉県立大学 保健医療福祉学部看護学科

【はじめに】

自己効力感、育児という課題遂行にとって重要な要因の1つと考えられており、自己効力感を高めることは、育児の自信を高めることにもつながるといえる。

【目的】

3歳児を持つ母親の自己効力感に関連する要因としてソーシャルサポートとの検討することを目的とする。

【方法】

A市の3歳児健康診査を受診する児の母親800名を対象に無記名自記式質問紙調査を配布し郵送にて回収した。調査内容は属性、一般性自己効力感(以下GSES)16項目、ソーシャルサポート尺度15項目、育児支援チェックリスト6項目について回答を得た。研究の実施にあたり、所属大学の倫理委員会の承認を得るとともに、研究の目的について対象者に書面にて同意を得た。

【結果】

回収された308通(回収率38.5%)のうち、記載漏れのない306通を分析対象とした。対象者の平均年齢は 36.1 ± 4.7 歳であった。核家族274名(89.5%)、就業あり152名(49.7%)であった。GSESの5段階区分では、「低い」が34名(11.1%)、「やや低い」が94名(30.7%)、「普通」が76名(24.8%)、「やや高い」が92名(30.1%)、「高い」が10名(3.3%)であった。GSESの5段階区分の低い・やや低いをGSES低群とし、普通・やや高い・高いをGSES高群とし、ソーシャルサポート尺度と育児支援チェックリスト項目とのt検定を行った。ソーシャルサポート尺度では、GSES低群($n=128$)は 43.0 ± 5.8 、高群($n=178$)は 46.7 ± 5.3 であった($p < 0.01$)であった。育児支援チェックリストの項目では、「夫に何でも打ち明けられる」相談可群($n=250$)は 8.6 ± 3.7 、相談不可群($n=56$)は 7.5 ± 4.1 であった($p < 0.05$)。「実母に何でも打ち明けられる」相談可群($n=229$)は 8.8 ± 3.8 、相談不可群は 7.3 ± 3.8 であった($p < 0.01$)。「夫や実母以外に相談できる相手がいる」相談可群($n=282$)は 8.5 ± 3.7 、相談不可群は 7.2 ± 4.7 で有意差はなかった。

【考察】

ソーシャルサポートは、子育てで不安や困難感を解消する要因の1つであるが、GSESの関連要因でもあることが確認された。周囲からのサポートが子育ての自信につながると考えられた。

P2-018

在宅で医療的ケアが必要な子どもを育てる母親の蓄積疲労の特徴

宮崎 つた子¹、仲野 里美²、稲垣 夏江³、
杉山 謙二³、村田 博昭²、木村 めぐみ¹

¹三重県立看護大学、

²独立行政法人国立病院機構 三重病院、

³地方独立行政法人三重県立総合医療センター

【目的】

近年、医療的ケアを継続しながら在宅で生活する子どもたちが増加している。障害のある子どもは健康状態が不安定で、養育者や家族の身体的・精神的負担は大きい。本研究では、医療的ケアが必要な子どもの母親の1年間の蓄積疲労の変化とその特徴を明らかにする。

【方法】

対象は、医療的ケアが必要な子どもの養育者で、本研究の趣旨および方法、参加の自由意志等を文書と口頭で説明し、同意の得られた母親6名。調査期間は、2015年2月から2016年3月の約1年間。調査内容は、対象のデモグラフィック要因、養育・環境要因、蓄積的疲労徴候インデックス、育児ストレス、自由記載を約2ヶ月毎に質問紙を用いて面接調査を行った。なお、本研究は、協力病院の倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

【結果・考察】

対象者は、母親6名、年齢は28～44歳であった。面接は一人3回～5回、延べ24回の調査を行った。子どもの医療的ケアの内容は、在宅酸素療法3名、経管栄養1名、胃瘻4名、吸引6名、吸入3名であった。対象者の家族構成は核家族が5名、父方の親と同居が1名であった。蓄積疲労インデックスの特性項目別平均訴え率の結果、「気力の減退」、「一般的疲労感」、「身体不調」、「イライラの状態」、「不安感」、「抑うつ」、「慢性疲労徴候」の7つの分類で一般女性の平均値を上回っていた。特に「気力の減退」、「身体不調」、「イライラの状態」、「慢性疲労徴候」は、平均より10点以上高い結果であった。蓄積疲労の年間変化では、どの時期においても同年代女性の平均値を上回っている対象者が多く、1年を通して常に蓄積疲労を感じていた。自由記載からは、子どもの健康状態で母親自身の疲労やストレスの変化を自覚している対象者が多かった。対象者の語りからは、母親同士の仲間や夫・家族の協力が助けられたという反面、夫・家族の理解不足や温度差に精神的に苦しい時があったなど、人とのかわりに助けられたり、落ち込んだりしていた。在宅で医療的ケアが必要な子どもの母親の支援には、個々の状況やニーズに添った医療・福祉・教育など多角的な視点からのサポートが重要と考えられた。

【結論】

在宅で、医療的ケアが必要な子どもの母親の蓄積疲労を約2ヶ月毎の年間を通して調査を行った。その結果、季節的、時期的による蓄積疲労の変化はなく、年間を通して一般女性の平均訴え率より平均値が高かった。